「世の中に残る事業をつくる」

エイト日技の農業振興が着実に成果 子会社が夏イチゴ栽培で地域発展支える

> チゴの出荷量を見ると、 る。「『もうからない』こと **賃金(全国平均額)** 農林水産省の調べによる 業の担い手が減っている。 と宮下社長は指摘する。 の生産額(平均値) か人手不足を招いてい 卸売市場で取引されるイ 国の食料基盤を支える農 農業者の1時間当たり を下回

は夏から秋に出荷できる夏 11月はほとんど流通がな 夏だけ単価が上がって

を見せる。

は必ずついてくる」と自信 プロレベルで行えば、

販売や経営管理を のレベルでなく

につなげる工夫もしてい る。 穫した後の茎 はイチゴを収 すると雑然と ままで、 や雑草がその 量に直結しな している。 **| 寧さは収穫** 「手入れの という。 ハウス内 (宮下社

れにかかるっ 当たりの手入 イチゴ1株

を出すには需要をとら りを進める。 地域や産業の基盤づく ることが重要だ」とし、 012年にストロベリ 北の気候を生かし、 宮下社長は 新たな価値を付け 「利益

げていく「エイト日技流の農業振興」(宮下社長) 育て方や売り方に工夫を凝らし、着実に利益を上 が10年以上にわたり夏イチゴの栽培に取り組む。 の農業振興が実を結びつつある。子会社のストロ エイト日本技術開発が実践している地域伴走型

ム(秋田県仙北市、宮下聡一郎社長)

を実践。生産者の減少に直面する農業の在り方に

地域の発展を支えていく。

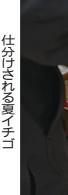
ち込んでもらい、 周辺地域の農家と連携 が育てた夏イチゴを持 するのが特徴だ。 に取り組むだけでな 同社は夏イチゴ栽培 農業振興を目的に 農家

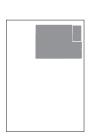
余力を他の作物などに回せ ビジネスを地域にさらに広 長は「農家は手間を省けて の作業を請け負う。宮下社 けや梱包(こんぽう) 無駄な投資を防いで利益 手数料はわれわれの収 」と展望する。 など

を整えて

まざまなサイズを出荷。 できている。 出回らないが、 般的な市場流通は収穫 チゴ大福に使うLLなどさ の具に使う28や38、 同社はクレープやアサイ 格はS、 など約450もの取引先に ゴは約8%と無駄なく流通 直接出荷しているのも強み イチゴの6、 卸売市場や農協を通さ 卸売市場のイチゴの規 -キ店やレストラン 7割程度しか Lの3種類。

ことも誇るべき建設コンサ も整ってきた。 世の中に残る事業をつくる 残るインフラだけでなく、 倍以上が確保できる仕組み ルタントの仕事だ」と宮下 こうした取り組みの結 生産額で最低賃金の2 八手不足に直面する





宮下社長